転校生と猫

しゃヴぇ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転校生と猫

【Ｎコード】
Ｎ４２６２Ｐ

【作者名】
しゃヴぇ

【あらすじ】
ナツミは恋がしたかった。日常の退屈を恋すれば吹き飛ぶだろうと。しかしナツミには恋というものがわからなかった。
ナツミが恋について知る物語。

起（前書き）

お題小説　お題は「猫」と「転校生」

誤字脱字訂正１２／１１

起

1　起

ナツミは恋がしたかった。日々の退屈を蹴散らせるのは恋しかないと思った。

「好きな人」とやらの話を何処で拾ってきたのか知らないが、友人たちは次々と持ってきて語っていく。

雪崩のように襲い掛かってくる「カッコいい」とか「優しい」といった言葉にナツミは適当に相づちを打って返していたのだが、いつのまにやら呑みこまれてしまったようで「恋とは大変面白いことではないのか？」と考え直した。だからナツミは恋がしたくなった。

しかし恋がしたいと思い立って即座に行動しようにも、恋というものがナツミにはなんなのかサッパリわからなかったので、まずは恋について調べなくてはと授業中にも関わらず鞄の中にある辞書を開いた。

この辞書によると恋というものはこのように説明されていた。

男女の間で、会いたい。一緒になりたい。いつまでもそばにいたいと思う強い気持ちと。

わけがわからない。ナツミは首を捻った。次に恋愛という言葉を思い出したのでそれにも目を通す。男女間の恋い慕う愛情。と書かれているのを見て、ナツミはますます恋と言うものがわからなくなった。この辞書は大丈夫なのだろうかと疑いながらも愛情とはなんなのか調べる。

愛情というものは「愛の気持ち。異性を恋い慕う感情」とあり、では愛とはなんなのだと調べてナツミはほんの少しだけ恋を理解した。

損得抜きで、相手につくそうとする気持ち。

なるほどなるほどとナツミは一人頷く。ナツミは恋は自己犠牲の

変種なのだなと頷く。損得勘定なしで相手につくすなんて正気の沙汰とは思えないのでナツミはそう結論づけた。
恋というものは私には向いていないようだ。とナツミは辞書を閉じて思った。誰かの為につくした覚えはナツミの記憶にはなかった。つくした事がなければ恋というわからないものを自ら望んで体験できるわけがない。
ため息を一つ。
結局。
退屈な毎日がそう簡単に変わるわけがないのだとナツミは思った。ましてや得体の知れない自己犠牲の精神で変わってたまるかと。
だけど。
簡単に変わってしまうのならそれは素晴らしいのだろうなぁと窓の外に広がる世界にまだ見ぬ「好きな人」との出会いをボンヤリ思った。

2

カズヒコという名の男子がいる。
大変だー大変だーと叫ぶ声が聞こえてきたら大体はカズヒコ。大したことのない話を大変だと騒ぐ男子はカズヒコ以外にそうそういない。
教室の外からどんどんと近づいてくるその声を聞いて「ああ、カズヒコだ」と教室の六割の人が真っ先に思い浮かべる男子。残りの四割はどう思っているのか知らないが、ナツミと同じく「うるさいのが戻ってきた」と思っているのだろう。
今日もカズヒコは大変だーと叫んで教室に飛び込んできた。こり

ゃ大事件だぞと言って床にぺちゃりと座り込む。また大事件ですかーと冷やかす言葉がかけられる。ここでいつものカズヒコならすぐさま「マジで大事件だよ！」と返すのだが、今回は随分と溜めが入って「マジで大ニュースです……」と息きれぎれに答えた。大事件が大ニュースに言い換えられていたのには誰も指摘はしなかった。それほどカズヒコの表情は「マジ」に見えた。

一方、ナツミもカズヒコの様子がいつもと違うと感じたのだが、それよりも今は恋について考える方が有益と再び辞書を開き、恋に関連する項目に目を通し始めた。

転校生が来るそうです……　とナツミの耳にもカズヒコの声は入ったのだが、どうせカズヒコのことだから　早とちりしたのであろうと流した。

カズヒコはそう言ってふらふらと立ち上がり、自分がいつもより注目されているのを感じた。カズヒコはいつもの決め台詞を言う事にした。

「大事件だろ？」

そう言ってカズヒコは得意げに笑った。

3

カズヒコは壇上に立ちもう一度「転校生が来るぞ！」と叫んだ。

半信半疑といった教室内一同を見て「もう一度言います」とカズヒコは加える。

「皆さん！　この学校に転校生が来ます！　しかもこのクラスに！」

壇上を両手で叩きカズヒコは叫ぶ。

「毎日職員室に入り浸った日々が今、俺の中で駆け巡ります……

幸子先生五十五歳妊娠事件。熊野ティーチャーぼうこう事件……

その他にも数え上げればキリがありません。今まで沢山のニュースを届けてまいりました……」
突然始まったカズヒコの演説にぽかんとする一同だったが、一部男子は昔を懐かしむように深く何度も頷いていた。
「出産事件の結末は幸子先生じゃなくて飼っている猫が妊娠したというオチ……　熊野のぼうこう事件は熊野のぼうこうが大変な事になったという、ぼうこう違い……　全ては俺の早とちりが引き起こした誤報の嵐でした。しかし！　今回はとちりようがないのです！　ちゃんとウラもとりました。故に……」
カズヒコは息を大きく吸い込み、ゆっくりと短めに吐いた。
「転校生が来る！　しかも明日！」
カズヒコは早とちりによる誤報をよく起こす。嘘をついてまで叫びまわることは今まで一度もなかった為、そこまで非難される事もなく、逆に仕入れたネタがカズヒコの中でどう変換されたか心待ちにする者もいるぐらいだ。それが良くも悪くもカズヒコの語る事件だ。
しかしどういうことか今日のカズヒコはいつもと違う。カズヒコはいつにも増して調子に乗っており、そのテンションにつられてか、ざわつき始める教室の何処からか「転校生は女子か？」という真剣な問が珍しく投げかけられる。カズヒコは腕を組んで唸り「どうでしょうねぇ……」とこれまた珍しく言葉をにごしたら、ハッキリ答えろー、それでもカズヒコかーと熱のこもった野次が飛んできた。
「女子……！」
野次を飛ばした男子たちから「おおっ！」と歓声が沸く。
「だったらオレはどうしようもなく嬉しいです」
ん？という声が上がったのを聞きカズヒコは口角を上げて笑う。
「性別まではわかりませんでしたー」とカズヒコはニヤニヤ笑って深々とお辞儀。さっきを上回る数の野次が飛び、消しゴムが舞った。消しゴムに打たれながら「ゴミンネー」と片手を前に出し謝る。カズヒコは満足したのか壇上を後にした。

カズヒコは自分の席に戻り、後ろに座るナツミに「どうだった？」と尋ねた。
どうだったか？　ナツミは辞書からカズヒコに視線を移して先ほどの演説らしきものを思い返す。ナツミは「馬鹿馬鹿しい」と思ったのでその通り伝える。その後「合格ラインは遥か先、地平線の向こう側だね」と付け加えた。
「でも転校生が来るのはマジだぜ？　カズヒコ嘘つかない！」
反省した様子もなくカズヒコは一人盛り上がる。嘘つかなくても誤報ばかりだろうに……　と思いながらナツミは転校生の事を考えた。この辞書によれば「ある学校から、他の学校へ移る生徒の事」となっている。明日来るという転校生の姿をナツミはイメージするが、転校生という肩書きを身に纏った「空から飛来する隕石」にしかならず、現実味がない。ナツミにとって転校生が来るというのは目の前に隕石が落ちますと言われるようなもので、想像しようのない未知のものだった。
「絶世の美女だったらどうするよ？　それを考えてもう今夜は眠れそうにないわ！」
ナツミの返答を待たずにカズヒコは喋りだし自分の両肩を抱き悶えてみせる。
「もしそうでもカズヒコには関係ないでしょう」
いやいや、と手を前に出してカズヒコはニヤつく。
「待ちに待った転校生ですよ？　超のつくほど可愛らしい女子だったらもう……　これは運命！」
なにが運命なのだ？　とナツミは思った。転校生が可愛い女の子なら運命というカズヒコの言葉の意味がナツミにはわからなかった。カズヒコと転校生の間に何か見えない繋がりがあるのかとナツミは考えたのだが答えを見つけることは出来ず、ナツミは「カズヒコはいつも通り頭がおかしい」と結論付けた。
ナツミの冷めた眼つきを真っ向からカズヒコは受けとめ、じゃあ転校生が男子だったら、という話を始めた。

「超イケメンだったらどうするよ？」
超イケメン。耳に入ってきたその言葉を使ってナツミは再び転校生の姿をイメージ。しかし想像できたのは超イケメン転校生という名の隕石だった。イケメンというのはイケてるメンズって意味だったか？　とナツミは考え、そもそもイケメンってどういう男子を称するのか知らないことにナツミは気づいた。
「ナツミが今をときめく女子高生ならイケメンを見て、キャーカッコいい！　ってドキドキするだろうがぁ」
イケメンを見ると女の子はドキドキする。私は女の子。私がドキドキした相手はイケメン。とナツミは仮説を立ててみるが馬鹿馬鹿しくなり「イケメンとはなんだ」とカズヒコに訊くことにした。
ナツミからのイケメンってなんだ？　という質問に「知らないのかよ」とカズヒコは驚きつつも簡潔に答える。「イケメンってカッコよくて知的でスポーツ万能ですって感じじゃねぇの？」と。
なるほど。とナツミの中で転校生のイメージが固まり大気圏を突入するのが隕石からミケランジェロのダビデ像になったのだがやはり現実味はない。カッコよくて知的でスポーツ万能の奴なんているのか？　とナツミは思った。そもそもかっこいいというのが理解できない。
「どこにそんな奴いるのさ？」
カズヒコは眉間にシワを寄せて唸る。
「例えばでいいから」
ナツミがそう言うとうーん、と腕を組んで唸りナツミを見つめる。少しの間を置いて、カズヒコの口元がつり上がった。
「超イケメンじゃないけど、ちょっとイケメンならすぐ近くにいるねぇ」
カズヒコが「面白いこと」を語るときに口元がクッと上がる癖をナツミは見抜き、次に出てくるであろう言葉を予想し、「誰？」と訊いた。
「オレ～」

予想通りの回答にナツミは鼻で笑った。カズヒコもナツミの様子を見てどうよどうよ？　と言って笑う。
飄々と自らをイケメンと言ってのけるカズヒコはやはり馬鹿だとナツミは思った。だけどそういう馬鹿は嫌いじゃないとも思った。

4

次の朝。
カズヒコの言った通りに転校生がやって来た。そのことをまず先に驚くべきだったのだが、彼女の容姿に皆目を奪われてしまい、そんな事があったことさえ忘れていた。ナツミはもちろんのことカズヒコ自身もその一人である。
朝川優子と書かれた黒板の前に立つ転校生をみて、ナツミは彼女をどう形容しようかと急に思い立つ。この滅多にない出来事をどうにかして表現したいという欲求にナツミは駆られたのだ。しかしナツミがその目で彼女を捉えようとすればするほどカズヒコの背中が邪魔をしてじっくりと彼女を見る事が出来なかった。
結局、転校生よりも目の前のカズヒコに気がいってしまい、ナツミの頭の中は「縦横無尽に動く馬鹿の背中。ナツミとカズヒコの終わらない挟み将棋」という表現でいっぱいになってしまった。そのことに気づいたのは転校生が着席した後だった。
着席した後もカズヒコはニヤついた顔で転校生……　アサカワさんを見つめている。まさか本気で運命とか思っているのでは？　と疑ってしまうほどカズヒコの目はトロンとしていた。
とにかく。この馬鹿がアサカワさんに失礼なことをしなければ良いのだが……　とナツミは杞憂。後で事前指導しておこうと心に決めた。

5

四時限目が終わり昼休みが始まるやアサカワさんの周りにはすぐに人だかりが出来ていた。ナツミもそこに加わろうかと思ったのだが、カズヒコの姿があるのを見つけてやめにした。転校生のお姿拝見といきたくてもセットでカズヒコのアホづらが付いてくるのは勘弁だ。

ため息を一つ。

ナツミは気持ちを切り替え図書室に行く事にした。図書室に行けば愛だの恋だのについてもっと詳しく書いてある本があるだろうからだ。

教室を出る時、カズヒコと目が合ったのだが私は無視した。

ナツミは図書室に着いて、まずは何処から探そうかと考えた。偉人の生涯を書き綴った本なら恋とかについて面白おかしくさらには美しく書かれているだろう。恋愛小説も悪くない。恋の心理も気になる。そんな事を考えながら日本作家の「モ」の段を見る。ある作家の小説が読みたくてしょうがなくなって、ナツミは図書館に足を運ぶ事があった時には必ず確認している。しかし今日もお目当てのものはない。いつになったら返却されるのだとナツミは思った。

さて、とナツミは立ち上がり今日の目的は「恋」について調べる事なのだ。と気持ちを入れ替える。

ナツミの前にはずらりと書籍が並んでいる。その前に立ちどれから手をつければ良いのか読めばわからなくなった。

「何を探しているの？」

そんな時隣から声が掛けられた。いつからそこにいたんだと驚き、ハッとして見れば転校生のアサカワさんだった。ナツミは突然声を掛けられた事より、何故ここにこの人がいるのだ？　と混乱していた。

「ごめんなさい。驚かせちゃったかしら……？」

ナツミは混乱が続いていたようで目を丸々開いて二度頷いた。
「貴方が教室から出て行くのを見てついてきちゃったの」
アサカワさんは澄んだ透明の声で言った。そう言われてナツミは「ああ、そういうことか」と頷いたのだが、なんでついてきたんだ？　という新たな疑問が浮かび再び混乱。
ナツミは混乱しながらもアサカワさんの姿を形容し始めてしまった。
「アサカワさんの両手両足は長く細く、簡単に折れてしまいそう。腰まで真っ直ぐ伸びた髪は黒く黒くミステリアス……」
ナツミはそこでハッとし、私はなんてことを口走ってしまったのだと後悔。最悪。ああ、やってしまった。もう駄目だ。アサカワさんがどんな言葉を返してくるのか想像してナツミは頭がクラクラした。転校生アサカワユウコは口を開くまで長い時間がかかった。ほんの何秒かだったのかもしれないのだが、ナツミにはおそろしく長い沈黙だった。
「面白いわね。次は私の顔を表現してみて」
そう言ってアサカワさんは微笑んだ。

承

2

結局ナツミはアサカワの顔について表現できずに固まるしかなく、そんなナツミを見てアサカワは「変なこと訊いてごめんね」と髪に手をやりアサカワは謝り、少し間を開けて「お昼、一緒に食べない？」とアサカワは言った。静かに微笑むアサカワから変な圧迫感の感じナツミはただ頷くしかなかった。

ナツミは隣を歩くアサカワにドギマギしながら、購買部に向かった。そのついでで学校内の案内もしてしまえとナツミは校内の設備について全力で表現した。言葉に詰まりながらも目に留まったもの全てを必死に説明しようとするナツミの様子を見て、アサカワはナツミの言葉を深く味わうようにゆっくりと頷き微笑む。そのアサカワの全てを包み込むような優しい眼差しにナツミの頭の中は混沌と化していた。何故そんな顔が出来るのだ！　とナツミは心の内で叫びながらも、ナツミはナツミの言葉で表した。屋上に着いた頃にはナツミは力が尽きかけようとしているのか、口数は少なくなっていた。

ナツミは扉を開けて屋上へ出た。ナツミの前に広がるのは安全対策の名の下に配置されたフェンスとその先に見慣れてくすんだ町並み。ナツミはアサカワに「つまらないでしょ」と言ってみたのだが、アサカワは「そんなことないわ」と即答して金網越しの景色を見に走った。ナツミはアサカワの隣まで歩いて彼女が見ているであろう方向を見る。しかしナツミにはやっぱし退屈なものにしか見えなかった。アサカワさんの目にはこれがどのように映っているのか、とナツミは気になったのだが彼女もいつかこの景色を「退屈なもの」と感じるようになるだろう。と結論づけた。ナツミは購買部で買ったアンパンの封を開け、かぶりつく。やはりアンパンは甘い。ナツミはそう思ってため息を一つ吐いた。

ナツミがアンパンをかじりつく姿を見てアサカワも購買部で買ったサンドイッチを小さくちぎって口に運ぶ。二人は黙々と金網の先に広がる景色を見ながら昼食を始めていた。
ナツミはアサカワより先に食べ終わり、ボンヤリとアサカワの横顔を眺めた。アサカワさんの大きな瞳は少し眠たげ。だけどその瞳からは見るもの全てを射抜いてしまうような強い力を感じる。黒髪はこの硬い風に吹かれようともしなやかさを失わずにふんわりとたなびく。唇は軽く開かれ、ちぎられて小さくなったサンドイッチが運ばれていく。咀嚼、咀嚼。そして次が運ばれる。
アサカワユウコは芸術品である。
アサカワユウコは機械仕掛けの人形である。
ナツミはアサカワについてそう思った。そこで一旦表現するのをやめにしてナツミはアサカワに何故転校してきたのか？　と尋ねた。
「私情によって転校」とアサカワは短く答えて微笑む。
そんな事よりもっと面白い話をしましょうよ、とアサカワはそう言って丸々とした大きな瞳をゆっくりとナツミに向ける。ナツミはまた妙な圧迫感を感じて頷いてしまい、頷いてから面白い話ってどういう話なんだ？　と考えた。しかし、改めて面白い話と言うのを考えてみるとなかなか思い当たるものがナツミにはなかった。
「私、面白いことが大好きなの。面白いと思えるものなら何でも好き。ちなみに……」
ナツミちゃんのさっきの表現も面白いかったよ、と言ってアサカワは微笑む。
「だから私はナツミちゃんが好きなった」
アサカワが「好きなった」と当たり前のように言われたナツミの

中では何故だという疑問符がボコボコ湧いてくる。あまりにも突然の事だったのでナツミは「好き」という言葉の意味を調べようと思ったが、生憎手元に辞書がないため何も出来ず手を握ったり開いたりするしかなかった。そんなナツミを見てアサカワは優しく微笑みナツミの手を取った。

「私たち面白い同盟というものを組まないかしら？」

ナツミは手を軽く握られ困惑する最中、さらに「面白い同盟」を組まないか？　というアサカワのわけわからない言葉を耳にして、ナツミの脳みそは沸騰寸前オーバーヒート。アサカワはナツミの返答も待たずに「面白い同盟」の説明を始めた。

面白い同盟とは、面白いことを発見、研究、実践するという趣の会らしく、簡潔に説明すると会員同士で面白い話を持ち寄って、その面白い話をさらに面白くしようというよくわからないものだった。ちなみに現在会員はアサカワただ一人らしく、そもそも今思いついた会らしい。日常を退屈だと感じているナツミは面白いものを見つけるなんて到底できそうにないと思ったのだが、もしかしたらそれに入れば退屈から抜け出せるかもしれないとと考え直し、もう一度良く考えてから「組みます」とナツミはハッキリ答えた。

アサカワの笑顔に押されてナツミはそう言うしかなかったとも取れる光景だが、ナツミはハッキリと明確な意思を持って答えたのだった。

「ああ、素晴らしきは貴方の瞳。燃えるようにギラギラとその眼光は乱反射。アウトサイド、インサイド。二つをつなげようとする私の指先は語り始め、狂ったようにカタカタと震えるわ」
屋上から教室に戻る途中、アサカワが突然訳わからない言葉を口にして、ナツミは固まる。立ち止まったナツミをアサカワは不思議そうに眺め、困ったように眉間にシワを寄せた。
「あら？　つまらなかったかしら？　貴方みたいに表現というものをしてみたのだけど……」
そう言ってアサカワは微笑む。ナツミはアサカワの表現を声に出して理解しようとしたのだが、サッパリわからない。そもそも何を表現したのかナツミにはわからなかった。
「どういう意味なの？」
「意味なんかないわ」
ナツミの質問にアサカワは即座に返答。そして眠たげな目を細めニヤリと笑う。その表情を見てナツミは彼女から感じる変な圧迫感がなんなのか少しだけわかった。アサカワさんの言動は予測しようのない形で現れる。その突拍子のない言葉は人形のような彼女の姿とまるで正反対で、より異様さを際立たせている。ある意味でカズヒコと同種の人間なのだと思うのだがどこか違う。その違いこそが私がアサカワさんから感じる圧迫感なのだと。
「楽しいわね」
アサカワはナツミの困惑した表情を見てそう一言。
これが楽しいのか？　とナツミは思ったのだが、今のが楽しいのなら私もやってみようと思い何か同じような表現を考えてみた。しかし、アサカワが語った言葉の何ともいえない雰囲気、不思議な感覚を呼び覚ますような表現が出てこなかった。
アサカワはもう一度「楽しいわね」と言って微笑む。
アサカワと並んで教室に帰ってきたナツミは、教室内一同から「どういうことなのだ？」という疑問と羨望が織り交ぜられた視線にさらされた。その沢山の目をナツミはパッと見て、その中にニヤつ

いた男子の顔を見つけため息を一つ吐く。カズヒコだ。教室の後ろで壁に寄りかかって他の男子と話をしていたと思われるカズヒコの体勢は、ナツミと目が合った瞬間に今にも駆け寄ってきそうな雰囲気を出していた。カズヒコの表情から「大事件！」といういつもの決まり文句がナツミの頭の中に浮かんだ。

アサカワはナツミに「また後でね」と呟いて自分の席に戻って行く。また後でってアサカワさんまだ何かあるのですか？　とナツミはアサカワの後姿を睨むが、いまだ自分を見つめる沢山の目に耐え切れずナツミも席に戻った。

席にナツミが座るとカズヒコは友人との話を打ち切ってナツミのもとに向かう。駆け足で自分の席に戻ったカズヒコは椅子をひっくり返してナツミの方へ向ける。そして「さあ何があったんだ！」と言ってどかりと座った。

「別に何もない」

「いやいやいやいや……　何かあったに違いない！　そうじゃなきゃナツミちゅあんが転校生ユウコちゅあんと一緒に帰ってくるはずなぁい！」

カズヒコの妙な言葉遣いにナツミはメンドクサイ奴だと思った。それよか私がアサカワさんと一緒にいたのがそんなにおかしいのか？　とナツミは心の内で呟き、「偶然一緒になったのだ」とカズヒコに言った。

「じゃあ、ユウコちゃんが言った『また後でね』ってどういう意味ですか！」

「知らないわよ」

ナツミはカズヒコの地獄耳に呆れながらそう答えた。

「そんな事カズヒコには関係ないでしょうに。それとも何？　カズヒコちゅあんは私を通してユウコちゅあんとお近づきになりたいんですかぁ？」

カズヒコの口調を真似してナツミはそう言ったあと、そういえば図書室で何も借りてないぞ、と思い出した。そこでまたため息を一

つ吐き、ナツミは鞄の中の辞書を出して読む事にした。
「まあ……　お近づきになりたいなぁと思ってみたりしてますが……」
　カズヒコがごにょごにょ言っているのを耳にして、カズヒコらしくない、とナツミは思った。昨日カズヒコが言った運命という奴のせいか？　と考えたら急にカズヒコに意地悪したくなり、何でそんなに気になるわけ？　とナツミは尋ねた。
「いやぁ……　わたくしカズヒコとして、ナツミさんの新たなご友人のことを詳しく知る必要がありましてですねぇ……　いや、好きとかそういうのじゃないですよ？　好きなのはナツミさんですから。でもユウコさんが気にならない訳ではなくてですねぇ……」
　そこでカズヒコは一度間を開ける。
「とりあえず紹介して！」
　まどろっこしい言い方をした挙句に結局それか。カズヒコはやっぱし馬鹿だ。そう思ってナツミは笑ってしまった。好きなのはナツミさんですからと言っておいてその後すぐに紹介してと言えるカズヒコはやっぱり馬鹿だと。
「わかったわかった。あはは。ああ、ホントおかしい……　ふふ。はぁ……　ホント、カズヒコはやっぱし馬鹿だよ」
　ナツミが楽しそうに笑うのを見て、カズヒコは「ホントに馬鹿だよ」と小さく呟き笑った。

　だらりだらりとナツミたちは午後の授業を消化していき、放課後に。
　ナツミは「放課後になりましたよー」とチャイムが鳴り響くのを

聴いて、チャイムという奴は何でも笑顔で淡々と語れる奴なんだろうな、とぼんやり「チャイムさん」のことを考えた。そんなことを考えたのは今私の机の横に立つアサカワさんのせいなのかもしれないな、とナツミは思った。

帰宅する人や部活に行く人などをナツミはぼんやりと見送り、前の席で石のように固まって座っているカズヒコに目をやり、ナツミはアサカワに視線を戻す。

「あれですか？　さっき言ってた、また後でねって言葉の意味は面白い同盟の活動しますよってことですか？」

ナツミの問にアサカワは柔らかな声色で「もちろんよ」と即答。ナツミはもう一度カズヒコに目をやり、カズヒコの話をしなければと思った。

「そこで一つ提案がありまして……」

「なあに？」

「面白い同盟に推薦したい人がいるんですけど……」

「それはそれは……　是非とも加わっていただきたいわ」

面白ければ。とアサカワは付け足す。カズヒコの身体が一度大きく揺れる。微笑みながらもアサカワの言葉はとても冷たい響きがあった。アサカワが何を基準に「面白い」と判断するのかわからない。アサカワから見たカズヒコが面白いかどうかわからなかったが、ナツミは「面白いです」と答えた。

「その人はどこに？」

アサカワがそう言ったのを聞いてナツミは「ここに」とカズヒコを指した。アサカワはカズヒコを下から上へと品定めするように眺め、首を傾げてナツミに視線を戻す。

「面白いのかしら？」

「それはもう面白いです」

「本当に？」

「本当です」

アサカワは眠たげな目をもう一度カズヒコにやる。アサカワは何

か釈然としない様子だったが「ナツミちゃんがそういうなら……」と言ってカズヒコの肩を叩く。叩かれてカズヒコは小さく震えた。

「お名前は？」

そう声を掛けられたカズヒコはがばっと立ち上がり「アサダカズヒコです！」と元気よく答えた。ナツミにはカズヒコのその姿がおかしく見えたのだが、アサカワにはその姿から何も感じなかったようで「よろしくね」と一言言ってナツミに向き直り「行きましょうか」と微笑んで教室の外へと歩き出した。ナツミはカズヒコと自分の待遇の違いに戸惑いながらも、簡単に流されてしまった事がショックなのか氷のように固まっているカズヒコの手を引っ張ってナツミはアサカワの後を追った。

スタスタと先を進むアサカワを追ってナツミとカズヒコがたどり着いたのはいたって普通の喫茶店だった。安っぽいシャンデリアから射す温かな光が退屈以外に表現しようのない店内を照らしている。タバコのヤニで薄いクリーム色に変色したであろう壁には椅子の図面らしきものが額縁に納められ飾られている。もう一度ナツミは店内を見渡してやはり普通だ。と思った。アサカワさんのことだからてっきり妙ちくりんなところへ行くものだと考えていたナツミは安心しつつも少し残念だと思った。そう思ってナツミがカズヒコに目をやると珍しく険しい表情。難しい事を考えている様子だった。

「あら珍しい」

カズヒコは眉を上げて「なにがー？」と返す。ナツミは難しい事考えてるでしょ、とカズヒコに言った。

「そんなことないよー」

「嘘つけ」

そうナツミに言われてカズヒコは、あはは、と笑う。
「お見通しですかー」
「お見通しよ」
「じゃあなに考えてるかわかるー？」
あたりまえじゃない。とナツミは思い、カズヒコに「どうせアサカワさんのことでしょうが」と言った。するとカズヒコはまたまた「はははは」と笑い、違いますよー、と目を細めて答えた。
「じゃあなに？」
なんでしょうねぇ？　とカズヒコははぐらかし、カウンターでアイスコーヒーを注文した。すでにアサカワは会計を済まし、席についていた。大きな丸いテーブルにアサカワが一人待っているのを見て、なんか変な光景だなとナツミは思って、よくよく考えるとこういう場所に友人と来ることがあまりないからだ。と気づいた。カズヒコはトレイに乗せられたアイスコーヒーをお行儀よく両手で持ってアサカワの待つ席へ向かって行った。
なんか緊張するなぁ……　と思いながらもナツミはカズヒコと同じアイスコーヒーを頼んだ。
ナツミが席に着く。それを待っていたかのようにアサカワは口を開いた。
「なんか無理やりだった。ごめんね」
なにがだ？　とナツミは思ったのだが、なんとなく「別に問題はないよ」と答えた。そう聞いてアサカワは安心したのか短く息を吐いてカズヒコに視線を移した。アサカワにジッと見られカズヒコは難しい顔をした。
「カズヒコくんは何か面白い話ある？」
「ない！」
カズヒコは即答する。それを聞いてアサカワは何か考えるように首を傾げた。少しの間を置いて今度はナツミを見る。
「ナツミちゃんは何かある？」
ナツミはカズヒコと同じくないと答えた。しかし、アサカワはそ

れを聞いて微笑む。
「実は私もないの」
カズヒコが「おお」と感心したかのように声を上げた。何に感心したのかナツミにはわからなかった。
「変な話だけど、面白い同盟って毎日退屈だと思っている人が組むものだと思わない？　だってそうでしょう？　面白いことが身近にあったらこんな同盟に入る必要はないし、組む必要もない」
アサカワがそう口にして、確かにその通りだ。とナツミは思った。
「つまり、私は退屈している。ホントごめんなさい。退屈してます」
アサカワは申し訳なさそうに謝っているのだが、ナツミは何か釈然としなかった。
「ではこの退屈をどうやって克服するか？　という問題が出てきます」
アサカワはそう言った後、カズヒコに「あなたはどうやって克服しますか？」と尋ねた。カズヒコはその問題が出されて嬉しいのか楽しいのか眉を大げさに吊り上げ、口角もクッと上がった。
「退屈を楽しく語ればいいんじゃない？」
そう言ってカズヒコは得意げに「どうだ？　どうだ？」と身体を揺らす。
「じゃあナツミちゃんはどうやって克服する？」
そう言われて、まるでこの時の為に私は恋のことを考えていたのでは？　とナツミは思った。しかし、今この場で言うべきかナツミは迷った。アサカワはナツミを急かすことなくただ微笑んでいる。カズヒコもナツミの答えが気になるようで身体をゆっくり揺らしている。ナツミは意を決した。
「恋をすれば退屈しないと思う」
ナツミはそう口にして顔が熱くなっていくのを感じた。カズヒコはその答えに驚いたようで身体を大きく揺らして椅子ごと倒れた。
「恋ですかぁ！？」
カズヒコは立ち上がって椅子に座りなおす。そしてアイスコーヒ

ーをぐびぐび飲んだ。飲んで少し間を置き今度は「誰に恋してるんですかぁ！？」と叫んだ。カズヒコの大きな声で他の客から睨まれた。
「恋する相手がいたら退屈してないわよ……」
「はぁ……　よかった」と言ったあと、「オレに恋してないんですかぁ！？」とこれまた大きな声で言った。
「カズヒコに恋するわけないでしょうに。ドキドキなんて感じた事はありませんよ」
　マジかよぉ！　と叫んだところで店員さんから注意された。
「それがナツミちゃんの答えね？」
　ナツミは頷く。
「じゃあ明日からナツミちゃんの為に三人で恋について調べましょう」
　アサカワはそう言って微笑む。そこでカズヒコが「アサカワちゃんの解決方法はなんなの？」と訊いた。アサカワは「秘密です」と答えた。
　なんかよくわからない展開だけど、それで恋できるのならいいか。とナツミはボンヤリ思った。

転（1）（前書き）

4／5　誤字訂正……

転（1）

あの日、喫茶店で恋について調べる事になったナツミとカズヒコなのだが、何をするわけでもなくボンヤリと日々を消化して一週間が経った。クラス内のアサカワフィーバーも落ち着き、結局アサカワが来る前と対して変わらなかった。カズヒコはいつもの様に「大変だー」と叫んでいるし、そんなカズヒコを見てナツミは「馬鹿みたい」とボンヤリ考える。アサカワは教室にいることが少なく、同じクラスにナツミですら、アサカワが学校に来ているのかどうかもわからなかった。アサカワが学校に来ていないのなら、その間彼女は一体何をしているのか？　と考えたのだが見当もつかず、ナツミにはわからなかった。

昼休み、教室でナツミはアンパンをほおばりながら読書をしていると、バックの中で携帯が震えていることに気づく。誰にも悟られないように取り出し、開いて見ればメールが一通。差出人はアサカワだった。

Ｆｒｏｍ：朝川優子
Ｓｕｂ　：ユリイカ！

はいはい。あなたの優子ですよ。Ｙｏｕの子ですよ。あはは。
さてさて、本題に入ります。
ユリイカ！　ユーリカ！　ヘウレーカ！
わたくし、朝川優子は面白いものを発見しました。嬉しさのあまり裸になって町中を駆け回りたいところですが、タイホーされちゃうからやめときました。ここ笑うところだよ？
見つけたからには面白い同盟のメンバーとしてご報告をしないと……　と思い、今回メールを送ったしだいであります。一応カズヒコくんにも送っときましたっと。

今回発見したのは恋です。そう！　恋なのですよ！
続きはこの前の喫茶店で！

ナツミはこの異様にテンション高めな本文を読んで、本当にアサカワさんが書いたのか？　と疑った。しかし紛れもなくアサカワから送られてきたものであるのは間違いなかった。
ナツミはすぐに返信文を打つ。

Ｔｏ　　：朝川優子
Ｓｕｂ　：ユリイカ？

まったく話の流れが見えません。
今何処にいるんです？
というか最近学校来てます？

そうナツミが打ち終えて送り、アサカワさんに一体なにがあったのか？　と考えた。「恋を発見した」からアサカワさんのテンションが高いのだ、とナツミは思ったのだが何か違う気がした。
もしかしたら朝川優子という人間は元々こういう人なのかもしれない。とナツミは結論づけて、アサカワについて考えるのを一旦やめた。カズヒコが教室に戻ってきたのがナツミの目に入ったからだ。
カズヒコはナツミと目が合うと、ニヤッと笑いナツミのもとまでやって来た。
「アサカワちゃんからメール来た？」
ナツミが頷くとカズヒコは目を細めてニヤつく。
「ナツミはどうするつもり？」
何を？　とナツミが言うと「アサカワちゃんのこと」とカズヒコは答えた。
ナツミの中にはアサカワさんの所に行くという考えしかなかった為、どうするか？　と訊かれて他にも選択肢がある事を思い出した。

手の中で携帯が震えて、ナツミは少し躊躇ったあと携帯を開いた。

Ｆｒｏｍ：朝川優子
Ｓｕｂ　：百合烏賊！ｗ

話の流れは気にせんでよかと。
現在喫茶店どすえ。この前カズヒコくんと三人で行ったところよん。
学校には顔出してませんねぇ。
百合烏賊ってどう思う？　面白いかな？

バラバラに分解された文章を読んでアサカワは喫茶店にいるとだけナツミは理解した。
「行くの？」
カズヒコの問にナツミは少し考える。アサカワさんは綺麗な人だ。だけど確実に彼女の性格は歪んでいる。そんな人に自分から関わりに行くのか？　今はまだ何も起きてない。しかし、アサカワさんと関わり続ければいずれ傷つく。
そう思いながらもナツミはアサカワの待つ喫茶店へ向かう事にした。
そんな損得感情で人間関係が形成できるのなら私たちは苦労しないのだよ明智くん。とナツミは心の内で呟いた。
「行くわ」
「まだ学校は終わってないよ？　中抜けって奴になるよ？　それでも？」
カズヒコの問に「それでも行くよ」と答えた。その言葉を聞いてカズヒコは腕を組んで黙り、ナツミを見つめる。カズヒコの真顔というのをナツミは初めて見た気がした。
「……ナツミが行くのならオレも行くよ」
「なんで？」

ナツミが聞き返すとカズヒコは「ナツミが行くから」と答えて柔らかく笑う。そんな顔も出来るのか、とナツミは感心して、カズヒコの言葉の意味がおかしい事に気づく。私が行かなければカズヒコも行かないのか？　と。
「何かおかしい？」
おかしいわよ。とナツミは小さく呟いた。

ナツミは途中下校した経験はない。アサカワのところへ行くと行ってみたものの、どうやって見つからずに外へ出るか考えてナツミは未だ教室にいる。どうやったら出られるんだろ？　とカズヒコに訊くと「だろうと思った」と言って笑った。
「どうやって外に出るか？　簡単だよ。校門から出ればいい」
カズヒコは当たり前のことのように言うが、それじゃあ先生にばれるでしょうに、とナツミはため息を吐いた。
「授業が始まればどちらにせよばれるっての。ナツミ的には誰にも見つからずに出たいのね？」
ナツミは当たり前でしょうと言って、カズヒコに呆れた。
「じゃあここでナツミちゃんに問題です。校門は一つしかありません。校門から外に出るためにはだだっ広い校庭を横切らなければなりません。そんなところ歩いたら？　まず見つかるでしょう。では何処から出ますか？」
はぁ？　とナツミは聞き返した。何処から出るかって校門からでしょうが。それ以外に何があるのよ。
「あらあら。聡明なナツミさまにはわかりませんかぁ？」
そう言ってカズヒコは口元を吊り上げる。馬鹿にしてるのかこい

つは……？　とそのニヤケ面をナツミは睨む。
「すいません調子に乗りました……　答えは何処からでも出れるということで……　いや、そんな目で睨まれてもホントですって……」
カズヒコはナツミの視線に耐えかねて、ペコペコと謝り、「ついて来ればわかるから」と言ってナツミの手を取った。
急に手を握られナツミは固まる。「何してんの」とカズヒコは固まっているナツミを見て言った後、少し考えるようにカズヒコはナツミ見つめた。そして口元をクッと上げて手を繋いでいないもう片方の手でナツミの頬をペチペチと叩いた。
「ナツミ！　気をしっかり持てぇ！」
そこでやっとナツミはカズヒコを殴ることが出来た。

カズヒコの「秘密の出入り口」を通ってナツミは学校から外へ出ることが出来た。秘密といっても男子の間では有名な抜け道らしく「中抜けしようと思う奴はナツミ以外にも沢山いるってことだ」とカズヒコは笑う。ナツミはカズヒコもその一人なのだろう。と推測した。抜け道を抜けるとチャイムが聞こえてきた。昼休みが終わったようだ。
ナツミは暖かい日差しと硬く冷たい風をその身に受けながら、中抜けしたことに今更ながらドキドキする。
目の前に広がる景色はいつもとまったく同じなのだが、ナツミは妙に新鮮だと思った。多分自分の心理状態が関係しているのだろう。と結論付けて、カズヒコと共にアサカワの待つ喫茶店へ向かった。
喫茶店に入ってナツミはカウンターでアイスコーヒーを注文をしてから、出てくるまでの間、アサカワが店内にいるか探した。この

前と同じ大きな丸テーブルに一人座る彼女を見つける。アサカワは退屈だと言わんばかりに眉間にシワを寄せて本を読んでいた。ナツミはカズヒコに一声かけてから彼女のもとへ向かった。
「ごめん。遅くなった」
ナツミがそう言って椅子に座るとアサカワは本から目を離して「何も問題はないわ」と言って微笑む。先ほどの険しい表情は一瞬にして消え失せた。
ナツミがアサカワに何を読んでいるのか尋ねると「不確定性原理について書かれたもの」とつまらなそうにそう言って本をパタンと閉じた。
「いきなり呼び出したりしてごめんなさいね。どうしても今じゃないと駄目な気がしたから」
アサカワは申し訳なさそうにもう一度「ごめんね」と言った。その後すぐにカズヒコも席につき、面白い同盟の会合は始まった。
「授業中にも関わらず足を運んでいただきありがとうございます。今回朝川優子が見つけたのは、恋らしきものです」
恋らしきものとはどういうことだ、とナツミは思ったのだが訊かずにおいた。カズヒコは神妙な顔つきで黙ってアサカワさんの次の言葉を黙って待っている。
「恋らしきもの……　言い換えるならば恋していると思わしき人物を見つけたと言ったところでしょう。実はだいぶ前から気づいてはいたのですが、確証が得ることが出来ず発表する事が出来ませんでした」
そう言ったのを聞いてカズヒコは「つまり確かな証拠を今日手に入れたということ？」とアサカワに訊いた。アサカワは「その通り」と頷く。
「あの子は恋をしている、と私は確信しました。しかしそれは私の主観のみで語られた答えに過ぎない。つまりは……」
「オレたちにも確認して欲しい……　ということ？」
カズヒコの言葉にアサカワは頷く。

「何を確認すればいいわけ？」
カズヒコは珍しくつっけんどんな物言いをするのを聞いて、カズヒコは何を怒っているんだ？　とナツミは思った。
「マツモトショウイチという方をご存知ですか？」
それを聴いた瞬間カズヒコは「うわー」と言って顔しかめた。マツモトショウイチをカズヒコは知っているようだったが、ナツミには覚えのない名前だった。
「なに？　アサカワちゃんは松本に恋したわけですかい？　やめときなさいって……　あの人滅茶苦茶だから」
「ねえ、マツモトショウイチって誰なわけさ？」
自分をおいて展開されていく二人の会話にナツミはいてもたってもいられず、カズヒコに訊いた。カズヒコは松本という人を「一学年下で何事にも徹底的な奴」と言った。ナツミはその言葉の真意がわからなかったが、滅茶苦茶で何事も徹底的だという人を想像してなんとなくヤバそうな感じだと思った。
マツモトが誰かに恋したわけぇ？　それだったらオレは興味ないかなぁ。と言ってカズヒコは椅子の背にもたれかかって天を仰ぐ。。それを見てアサカワは眠たげな瞳を大きく開いて「違うのですよ」と笑う。
「マツモトくんに恋する子がいるのです」
アサカワがそう言って、黙った。長い間三人の間に妙な沈黙は漂い、うるさくも静かでもない店内のＢＧＭがナツミの耳に入ってきた。
「ありえねぇ！」
カズヒコは思い出したようにアサカワに叫んだ。「有り得ないの？」とアサカワはその言葉に返す。カズヒコはもう一度、今度は静かにゆっくり「ありえない」と言った。
ならば尚更皆で確かめる必要がありますね、とアサカワは言って微笑んだ。

そういう訳で、ナツミとカズヒコはアサカワと共に学校前の植え込みの陰に潜んでいる。何故か？　校門から松本ショウイチが出てくるのを待ち伏せしているのだ。

アサカワは喫茶店で皆で確かめる必要がありますね、と言った。

「松本ショウイチの何にあの子は恋してしまったのか？　それがわかればきっと恋についてもわかるでしょう」

アサカワはそう言った。その結果、今こうして植え込みに身を潜めているのであった。

「出てきましたよ。ナツミちゃん。あの灰色がかった髪色の細い人だよ」

アサカワに言われて、ナツミは校門から出てくる松本ショウイチを見つけた。ナツミが想像していた松本ショウイチの姿はもっとギラついた眼をしていて忙しなく上下左右にやる狂った犬といった感じだったのだが、実物はそんな様子もなくおとなしい印象だった。案外ふつうじゃない。とナツミはカズヒコの耳元でそう言うと「そう思うだろ。実際その通りなのが怖いところなんだよ」とカズヒコは呟く。

「さっきと言ってる事が違うじゃないの」

「いや同じ。アイツは滅茶苦茶で徹底的な奴だよ」

ナツミの頭の中で疑問符が大発生したところでアサカワが立ち上がる。「さあ、追いかけましょう」と言って一人先に行ってしまった。ナツミはすぐにその後を追い、カズヒコはため息を一つ吐いてノロノロとナツミについていった。

松本ショウイチのその後の行動は以下の通り。
学校を出て松本は駅前のスーパーマーケットに入る。食品売り場だ。
松本くんは重みを確かめるように野菜を手に取り、カゴに入れた。それを何回か繰り返し、レジへと向かう。
会計を済ませた松本くんは買ったものを手際よくビニール袋につめていく。その姿にカズヒコは意外だといわんばかりの顔をしている。
「彼は週に一度は必ずここに来てるわ」
そうアサカワが補足して、カズヒコは「マジかよ……」と呟いた後「でも何故？」とアサカワに訊いた。アサカワはニヤリと笑うだけで答えなかった。
松本くんはスーパーを出た後、駅へと入っていった。
松本くんはタッチアンドゴーと言った具合に改札を抜けていくのをナツミは見て慌てたが、アサカワが「これをどうぞ」と言って切符を二人に手渡す。「用意周到だなぁ」とカズヒコは嫌味ったらしく言うのだがアサカワは気にもせず改札を通る。その後をナツミは続いて入り、カズヒコも続く。
電車に乗った松本くんは席が空いているのにも目もくれず手すりに掴まる。アサカワは「面白いでしょ？」と松本を見て微笑む。面白いと言われれば面白い。それよりもナツミはアサカワが松本くんを何度も尾行しているんじゃないのか？　と思った。カズヒコは依然松本ショウイチのその姿が腑に落ちないのか首を傾げる。バックから文庫サイズの本を出して読み始めた松本ショウイチを見て、ナツミはどう考えても普通の人にしか見えないと思った。
三人はそのまま十五分ほど電車に揺られた。
松本くんが降りるのを見て三人も降りる。
駅から出て駐輪場へ向かった松本くんは自転車に跨り、ついーと走っていった。

ここで松本くんを見失う事になる。
松本ショウイチを見失ってこれからどうするのか？　とナツミがアサカワに尋ねると、「何も問題はありません」と彼女は答えて一人歩き出した。「本当に大丈夫かねぇ」とカズヒコに愚痴られてナツミは「とりあえずついて行くしかないでしょうに」と返してアサカワを追った。ここでカズヒコは三度目のため息を吐いた。
アサカワの後をナツミは歩きながら、彼に恋する人物について考えた。正直言って松本ショウイチに対してナツミは何も感じない。それは彼と私の間に関係性がないからだろうか？　関係性があれば、私も松本ショウイチに恋する可能性があるのだろうか？
「カズヒコ、結局松本くんってどんな人なのさ？」
歩きながらナツミにそう訊かれて眉を吊り上げてニヤけるカズヒコ。
「知りたいの？　松本くんを知りたいの？」
出し惜しみをするカズヒコが憎たらしく見えて、ナツミはついカズヒコの胸を殴ってしまった。なんで殴ったのかナツミ自身わからなかったが、ナツミはこのモヤモヤしたこの気持ちはカズヒコが馬鹿だからいけないのだと決め付けた。
「あー、松本くんはさっきも言った通り滅茶苦茶で徹底的。ホントマジで。で、何が滅茶苦茶で徹底的なのかというと……」
そこでカズヒコは間を空けて考え込んだ。
「んー、彼の事は詳しく知らないというのをまず先に言っておきます。さて、少し彼の良くない噂から話しましょう。松本くん他校生ボコボコ事件から～」
松本ショウイチくんはこれはもう徹底的に殴る蹴るといった暴行をしたという話です。
松本くんが吹っかけたのか、それとも相手が因縁つけてきたのかわかりませんが、とにかくボッコボコにしたと。一方的に殴る蹴る。相手が倒れても殴る蹴る。何でそこまでするのというぐらい、殴る蹴る。ひたすらひたすら殴る蹴るですよ。その後どうなったのかは

知らないけど、そのぐらいならよくある話だろ？　でも松本は違う。殴ってる最中もいつもと雰囲気が変わってなかったという……　これが一つ目「徹底的な松本くん」の話。

「次は滅茶苦茶で徹底的な松本くんの話。お金の話」

ある日のこと、あ、これは半分噂話だからね？　半分はホント。体育の授業を終えて松本ショウイチくんが着替えていました。着替え終わって松本くんは自分の財布が無くなっている事に気づきました。どこかに落としたのか誰かに盗まれたのかはわかりません。

「そこからどうなったと思う？」

ナツミは徹底的な松本くんなら徹底的に探すのではとカズヒコに言った。すると「残念不正解」とカズヒコは返答。

彼は財布がないことに気がつくと、昼休みに学校にいる全男子生徒から十円を要求したのです。

「何を隠そうわたくしアサダカズヒコも十円渡したのですから！」

もちろん怖い顔した先輩がたにも十円貰いに彼は行きました。怖い顔した先輩は怒りました。何でお前にやんなきゃなんないの？と。そこで松本くんは先輩をボコボコにして十円奪ったとさ。

「この話の怖いところは財布がなくなってそれを探さないで十円を集め始めたところです。まさに滅茶苦茶です。うんでもって彼の財布は落し物箱に届けられてましたー　と言うオチ」

もちろん噂話だから尾ひれはついているでしょう。しかし、それ以来男子生徒は松本くんと関わる事を避け始めましたと……

「以上、松本くん物語でしたー　どうよ？　滅茶苦茶で徹底的じゃね？」

カズヒコが語った物語は現実味に乏しいとナツミは思った。結局ナツミには松本ショウイチがどういう人間かわからなかった。

「だからオレ正直ビビってんのよ。松本がもしオレ達に気づいたらどうなるんだろってね」

カズヒコはそう言って目元にシワを寄せて笑った。

そこからカズヒコはナツミに今日あった下らない話をベラベラと

一方的に話し続けた。時たまナツミが「馬鹿じゃないの」と相づちの代わりに打つ。そんな会話を二人は続けているとアサカワが立ち止まりくるりとこっちに向いて微笑む。どうやらここが目指していた目的地のようだった。
「ここは松本くんがバイトしているコンビニにです。シフトは確か五時からだったからまだ来てないね」
「え？　なに？　ここで松本が来るまで待ちぼうけ？　寒いんですけど……　ってか帰らない？」
アサカワは何か考えるように眉間にシワを寄せて「んー」と呻いた。
「そうねぇ……　今日はこの辺でいいかなぁ……　明日、松本くんを想う子に話を訊けばいいだけだし……」
なんだか今日はアサカワさんに連れまわされただけだったな……
とナツミはため息を吐いた。
「ちなみにだけど松本のこと好きな奴って誰よ？」
カズヒコがアサカワに訊いた。
「アユミって子。たぶんナツミちゃんは知ってるでしょう？」
ナツミはアユミという名前が出てきて驚いた。知ってるも何も私に「好きな人」の話してきた友人の一人だ。まさかアユミの好きな相手を追い回していたとは……　妙な話だ。
三人は松本くんのバイト姿を眺めることなく、駅まで戻り、各々の家へと帰っていった。

次の朝、ナツミは目覚まし時計の誤作動により三十分も早く学校に着いてしまった。
時計の誤作動というよりはナツミのご認識だったのだが、ナツミは認めない。ナツミの中では目覚まし時計が誤作動したのだ。校舎

に入って下駄箱から上履きを取った時、そういえば、アユミはこの時間は花壇の水やりをしている頃だな、とナツミは思い出して上履きを戻し校庭の端にある花壇まで向かった。
花壇が見えてくるとやはりアユミがいた。その横にもう一人いた。珍しい事があるもんだなぁとナツミは思って近くまで行くとアユミの隣にいるのが松本だった。
松本が無表情で花に水をやっている。それが面白いのかアユミは笑っていた。何だこの状況は？　と驚き固まっているとアユミがナツミに気づいた。
「オハヨー」
松本もナツミに気がついて、軽く頭を下げて水やりに戻る。
「アユミ、彼は？」
そうナツミが言うとアユミは「私の彼よー」と言ってにっこり笑う。
「なんかあれだけど、あーおめでとう」
ありがとう！　とアユミは言って「あの子ね、私が言うのも可笑しな話なんだけど変な人なんだ」と松本を指差す。
「最初彼は水やりし過ぎだとか言って急に私の花壇に割り込んできて、花について語りだすのよ。花の健康管理についてとか、土壌がなんたらとか……　最初はうっとおしかったんだけど、あの子が花について熱く語ってるのを聴いているうちに、なんというか……好きになっちゃって……」
はあ、そうですか。とナツミは思いながらも続きを聞いた。
「そしてね！　あの子が来年はコスモスを植えましょうとか目を輝かせて言うのを見てもう駄目！　気持ちが抑えきれなくなって……で付き合うことになったの」
ナツミは昨日の尾行に何か意味はあったのかということを考えてどっと疲れた。
「彼のどこが好きなの？」
ナツミがそう訊くと、子供っぽいところ。と言ってアユミは笑っ

た。

転2

ナツミは校舎に入って教室に入るまでの間、アユミと松本の二人について考えた。

アユミは彼の「子供っぽいところ」が好きと言っていた。ナツミにはその言葉の意味がわからなかった。

子供っぽい。何が子供に見えるのだ？　わけがわからん。あれか？　ギャップなのか？　異性の持つ雰囲気がイメージとかけ離れるほど観測者の恋心は点火されやすいだろうか？　難しい。非常に難しい問題だよ明智くん。

そんな事を考えて、ナツミは「恋について考える自分」に酔った。同時に馬鹿馬鹿しいと自嘲的に笑った。

そしてナツミは教室の前に着いた。こんな早くに入るのは初めてだ。とナツミは思って扉を開ける。

この時間に登校している人はいるのだろうか？　とナツミは入ってみると、先客はいた。見慣れた二人の姿を見て、よく出来た偶然だとナツミは思った。

窓際に立っていた馬鹿はナツミを見て「おはよう」と言った。ナツミも「おはよう」と返す。残ったもう一人に目をやると、彼女はいつにも増して眠たげな瞳で本を読んでいた。ナツミは声をかけようと思ったのだが余りにも近寄りがたい雰囲気だったのでやめにした。

ナツミはとりあえず自分の席に座った。座ればきっと馬鹿が話しかけてくるに違いない。とナツミは思ったのだが、馬鹿は依然来る気配なし。ぼんやりと窓の外を眺めているだけで心ここにあらずといった様子だった。本を読む彼女もまるでナツミに気づいていない様子だった。

しょうがない。そう考えてナツミは国語の教科書を鞄から出してパッと開いた。開かれたページから目についた「普通」という単語。ナツミはそれをじっと眺めた後、一度閉じ再度開く。次に飛び込んだ単語は「仲間」　その次は「よい歴史」　その次は……　その次は……

それから数日が経ったある日、ナツミはアサカワに読んでいる本について尋ねた。

彼女はその本を「不確定性原理について書かれたもの」としか教えてくれなかったが、ナツミが面白いの？　と訊くと彼女は少し迷った様に瞳を伏せた。アサカワはこの本を語りたくないようにナツミには見えた。それってどんな内容なのかナツミは尋ねた。「これは……」と彼女は弱く微笑んで語り始めた。

「私もなんとなくでしかこれを理解できてない。それも間違った理解かもしれない。それだけは最初に言っておく」

私たちはいつか必ず死ぬ。生きているのだから死ぬことは確定されている。これは絶対。

もしかしたら明日死ぬかもしれないし、もしかしたら明後日死ぬかもしれない。だけど、死なないかもしれない。でも百年後には必ずこの世界に生きていない。わかるでしょ？　そんなに人間は長生きできない。

少し話しがづれたわ。ごめん。今のは忘れて。

この世界の初期状態がわかればその後起きる出来事すべては完全に予測という機械的な捉え方に立ち向かうのが不確定性原理。

過去も未来も確率的にしか決まっていないと主張するのが不確定性原理。多分。

さっき言った明日死ぬかもしれないというのも確率的には有り得るということを伝えたくて先に言っておいたの。
例えば目の前で自分の親しい人が車にはねられて死にました。それは運命だったのかしら？　もし自分がその人の位置に立っていたなら死んだのは自分かもしれない。これは運命？　必然？　私はそれを予定調和なんて思いたくない。当然の結果なんて考えたくもない。認めたくない。
私は不確定性原理というのはある種の自然科学の哲学と捉えている。
不確定性原理を人間に当てはめて考えてるの。
「ナツミちゃん。私は男性？　女性？　どっちかな？」
ナツミは考えるまでもなく女性と答える。
「じゃあ次。私はいい人？　悪い人？」
ナツミは「いい人かもしれない」と答えた。
「最後に。私を好きになれる？　それともすでに嫌い？」
ナツミは答えなかった。アサカワはナツミが黙り込んだのを見て、弱々しく微笑む。
「私たちは生まれてから死ぬまで、絶対運命というものに縛られてなどいない。私たちは何にでもなれる可能性がある。もちろん無理なものもあるわ。でも、私たちは良い人間にも悪い人間にもなれる可能性がある」
そして……　アサカワは間を空ける。
「私たちは誰かに恋する可能性もある」
ナツミにはアサカワが何が言いたいのかわからなかった。だけどナツミは頷いた。
「私たちは沢山の可能性を内包している。シュレディンガーの猫って実験知ってる？」
知らない、とナツミは首を振る。
「箱の中に猫を入れるの。それで一時間の間に二分の一の確率で毒ガスが出るようにする。そして一時間後猫はどうなっているとナツ

ミちゃんは思う？」
猫は死んでいるか生きているかのどちらかかな。とナツミは言った。
「この話で箱の中の猫は完全に死んでいる状態とピンピン生きている状態の二つを兼ね備えているんだって。そして」
箱を開けると生きた猫か死んだ猫が出てくるって事。私もよく理解できてないのだけど……
「当たり前のことなのかもしれない。でも不思議。箱を開けてみるまで猫の状態は確定されてないのよ？　それで私が考えたのは……」
見えない心の中も色々な感情が渦巻いていて様々な可能性があるってことなの。
つまり、貴方は誰かに恋をしていると同時に誰にも恋をしていない。貴方が箱を開けるように自分の気持ちに気づいた時、結果は出る。
「私の捻じ曲がった解釈だけどね」
アサカワはそういい終えて、本を閉じた。
アサカワの言っている事の意味がナツミにはわからなかった。ただ分かるのはアサカワから見た私は、恋をしていて同時に恋をしていないということ。それも自分が気づくまでわからないということだった。
当たり前の事なのでは？　とナツミは思った。
「昔、ある人にこんな質問をしたことがあるの」
この世界は赤いのか青いのかって。
「その人は見る人によって違うって答えた」
アサカワの過去に何があったのかわからない。だけど、その人の答えが彼女を変えてしまったのだろうとナツミは推測する。
「アサカワさんの初恋ってその人だった？」
ナツミがそう尋ねるとアサカワは「そうなのかもしれない」と答えた。

それからさらに数日経ったある日。ナツミはカズヒコと二人で面白い同盟会議を開いていた。その場にアサカワがいないのは彼女と連絡が取れない為だった。

学校に再び来なくなったアサカワをナツミは心配していたのだが、「また面白いこと探してるんじゃね？」とカズヒコに言われ、そうかもしれない。とナツミは深く考えないようにした。

いつもの馬鹿話をカズヒコはベラベラと次々語って、それを「ふーん……」とナツミは返す。

「恋ってなにさ？」とナツミがカズヒコに質問した。

唐突に投げかけられた言葉に話の腰を折られたカズヒコだったが、「恋かぁ」と言って考えるように唸り、黙った。カズヒコの表情は相変わらずニヤけたままなのだが、ナツミにはどこか寂しげに見えた。

「恋は下心。愛は真心……」

誰かがそう歌っていたなぁ、とカズヒコは一人呟き、恋について語り始めた。

「正直言うと、俺もよくわからない。なんで人を好きになってしまうのか、ホントわからん」

まあわかれば苦労しないけどな。とカズヒコは呟く。

「恋ねぇ……　オレは恋ってのを感覚的なものだと思ってる。だってあの子を好きになるって思い込んで好きになれるわけではないし、何とも思ってない女の子を急に好きになってしまうかもしれない」

恋は計画的に出来るものじゃない。だからオレは感覚的だと思うわけ。

その言葉をナツミは「なるほど」と頷いて、カズヒコの言う「感

覚」について尋ねた。
「感覚……　これもまた説明し難いなぁ……　うーん……」
感覚、感覚。とカズヒコは繰り返し呟く。
「オレが言うのも変だけど、あれだろ。多分俺の言う感覚って奴は物語なんだと思う」
物語だよ。カズヒコはそう言って深く頷く。
「なんていうのかな。その人の物語が知りたいって感じだ。ものの捉え方、見方、自分の視野を拡げてくれる相手」
オレは変な子を好きになってしまう傾向がある。カズヒコは遠くの景色を睨むように目を細める。
「変な子っていうのは喩えだよ？　自分と違う相手、つまりはちょっと変わった子を好きになってしまう。何故かはわからない」
カズヒコの言葉に「お前が変だよ」とナツミは返す。カズヒコは顔をくしゃくしゃにして笑う。
「もちろんオレも男ですから性本能とか種の保存とかあります。好きな子一筋！　純愛を貫く！　といくら宣言しても、好みの女の子を、変わった子のことね、を見ればそういうのが合い極まって声を掛けてしまう。つまりそれが感覚」
感覚。それがカズヒコの恋の引き金となるものらしい。随分軽いノリの男なのだなと改めてナツミはカズヒコをそう評価した。
最後に「今好きな人はいるの？」とナツミはカズヒコに訊いた。
カズヒコは「いるんだけど……　正直わからね」と言って自嘲的に笑った。

またまた別のある日のこと。ナツミは壁一面に本棚となっている

自室にて「考えたことノート」を探していた。
考えたことノートとは、ナツミが自分の見た出来事について考えたことを書き溜めていた文庫サイズのノートのことだ。ここ数ヶ月、もしかしたら半年以上その存在を忘れていたのだが、アサカワやカズヒコとの出来事がきっかけとなり「前の私はどんなことを考えていたのか？」と考えてそのノートを思い出して探しているのだった。
ぎっちし詰め込まれた千冊以上あるかと思われる本棚……　まさしく壁と化した本棚から一冊一冊抜き出しては開き、タイトルを確認して閉じるという作業をかれこれ三十分ほど繰り返していたのだが、自身の「妙な癖」のせいでなかなか見つからない。
ナツミの「妙な癖」というのは、買った小説をルーズリーフで作ったカバーに包むというものだ。もちろんそれに包む事でタイトルや作家名は隠れてしまうのだが、本棚に並ぶ本を真っ白にしなければならないという異常な執着によってどうしてもやめる事が出来なかった。それがナツミの「妙な癖」というものだった。
探しているノートも文庫サイズということでルーズリーフに包まれている。だから本棚から一冊一冊抜き出しては開きタイトルを確認して閉じるのだ。
結局そのノートを見つけるまでに一時間とちょっと経ってしまった。床には白いカバーの本が所狭しと山の積まれている。それを見てナツミは後で片付けないと……　と考えてため息を吐いて、ベットに寝っ転がり「考えたことノート」を開いた。
最初のページにはこう書いてあった。

つきが落ちた昨日の夜は、
大変楽しゅう御座いました。
静かな貴方は私を見て、
蟲のようだと呟きました。
夜明けが怖いとネズミが叫び、
地面がひっくり返りました。

なんじゃこりゃ？　とナツミは眉間にシワを寄せる。
これを書いた時、何を考えていたのか知らないが、もう一度読み返すとナツミは酷く恥ずかしい気持ちになった。
次のページを捲る。

優しい対飼の手のひらに、
八日間も悲しみを、
伝えてしまった楽しい日曜。

やはり意味がわからない。
自分が書いたポエムを今一度読むとやはり恥ずかしいものだなぁ……　とナツミは赤面した。
次のページへ。次のページへ。
前半がポエムで、途中に落書きが数点。後半から考えたノート本来の「考えたこと」が書かれ始めていた。
最初は物語についてと書かれていた。ナツミは声に出して読んだ。
「物語とは完結された一つの世界である。登場人物の行動を私は追体験することにより、笑ったり怒ったり泣いたりする。素晴らしい世界だ。私もいつか世界を構築したい」
次は表現について。
「表現。自分の表したいものを表し示すこと。誰にも負けない表現が出来るようになりたい」
パラパラとページを捲る。人の名前が出てきた。カズヒコについて。と書かれている。
「カズヒコという男子と話した。カズヒコという男は馬鹿だ。どうしようもないくらい馬鹿だ。馬鹿だけど愛しい馬鹿だ」
なんだこの文は？　もう一度その文を読み、私がカズヒコと初めて話したときのことだとナツミは思った。次のページもカズヒコのことだった。

「カズヒコという男は何かにつけて私に話しかけてくる。何が楽しいのかいつも彼は笑っている。謎だ。やはりカズヒコは馬鹿なのだろう」

次のページもカズヒコのことだった。その次も。

私はカズヒコのことをこんなに考えていたのか？　とナツミは思い返したのだが、あまり印象が無い。見てて面白いから書いていたのだろう。とナツミは結論付けた。

パラパラとページを捲って「告白について」という文章が出てきた。ナツミは読む。

「私は彼のことが気になっているようだ。毎日毎日彼のことを書いている気がする。そんな時に彼から告白された。私を好きだと言ってくれた。今この胸の中にある気持ちはなんだろう？　モヤモヤとした感情のせいで胸は高鳴っている。これを恋と呼ぶのか？　わからない。わからない。明日返事するとだけ彼に言っておいた」

彼というのは……　きっとカズヒコなのだろう。彼から告白された覚えが無い。というより思い出せない。

どういうことなんだ。とナツミは次のページを捲る。

告白について2と書かれた文章を読む。

私は彼に答えを出すのが怖くなって、避けています。怖いのです。怖い……

だから彼が私に告白したことを忘れてくれるまで私は逃げようと思う。ごめんなさい。本当にごめんなさい。

きっと答えを出したら、彼は私を嫌いになるから。私は嫌われたくない。だから逃げる。

まったく思い出せない。次のページからはずっと白紙だった。

ナツミは考えたことノートを閉じて、ため息を吐いた。

私はカズヒコに告白されていた。私は答えを出さずに逃げた。つまり今も逃げている事になる。

だから、あんなにカズヒコは「恋」という言葉に敏感だったのだ

ろうか？
その時、私はなんて答えを出すつもりだったのだろう……？
今のナツミにはその時出そうとしていた答えがわからなかった。

転2裏　～カズヒコ

松本尾行を決行した翌日、カズヒコは朝早くに学校に呼ばれた。
呼んだ相手はアサカワである。
どうせ松本の件だろう。とカズヒコは彼女から来たメールを読んでため息を吐いた。だが、ナツミもお呼ばれされているに違いないとニヤけてしまう。
アサカワの行動は目に障る部分が多いが、そのお陰でオレはナツミと前のように話せるようになったのだ。
カズヒコはアサカワがあまり好きではなかったが、ナツミとの関係を修復させてくれた彼女に感謝していた。
午前六時。カズヒコは身支度を簡単に済ませて家を出た。
いつものように電車に乗る。車内はガラガラに空いているのをカズヒコは見て驚きつつも、この時間帯は空いていて当たり前か。と一人納得して席に座る。
重い目蓋に耐えながらカズヒコは電車に揺られ、乗り継ぎを経て目的の駅へと着くとカズヒコは降りる。欠伸を大きくして学校へと歩き始めた。
カズヒコが校門前に着いた頃には時計の針は七時を指そうとしていた。
陸上部がすでに朝錬を始めている。こんな朝早くからご苦労な事だ。と横目で見て、その奥に花の世話をしている男女を見つけた。二人が誰なのかわからなかったがその姿は楽しげに見えた。
あの二人のようになれたらいいなぁ。と思いながらもカズヒコは校舎に入った。
カズヒコは教室に入るとすでにアサカワは来ていた。彼女は本を読んでいたのだが、カズヒコが来たことに気づくと本を閉じて薄く笑った。

「おはよう。ナツミは来てないの？」
「呼んだのは貴方だけよ」
てっきりナツミも呼ばれているものだとカズヒコは思っていた。松本のことで何か話でもしたいのだろうと。しかし、呼ばれたのはオレだけ。
アサカワが何のためにオレを呼び出したのか？　とカズヒコは思ってそのまま口にした。
「貴方と二人っきりで話したかったからよ」
アサカワはそう言って「ここに座ったら？」と隣の席を指差した。カズヒコはそれを拒否するように窓際に向かう。この距離が君とオレの距離だとでも言うように。
「それで、何で呼び出したわけ？」
カズヒコは窓際に立ってからアサカワに向き直り、言った。
「さっきも言ったわ。貴方と話したいからよ」
「それだったらこんな早くから呼び出さなくてもいいだろうに」
「確かにそうね」
そう言ってアサカワは静かに笑った。
「でも駄目。貴方と二人きりになる必要があったから」
何故？　とカズヒコが訊く。アサカワは、必要があったから。と同じ言葉を繰り返した。
やはりこいつは苦手だ。とカズヒコは思った。物言いが刺々しくて攻撃的なアサカワの言葉を聞いていてカズヒコは気分が悪くなるのだ。早く話を終わらそう。そう思った。
「私のこと嫌い？」
「嫌いではないが、好きでもない」
「ふぅん……　じゃあどうすれば好きになる？」
知るかそんな事。とカズヒコは口に出しそうになった。
「どうすれば私は人に好かれるようになるの？」
「オレは教師じゃないんだからわからん。だいいち、教師だってその事を知っているかどうか……」

「貴方はナツミちゃんが好きなんでしょ？」
「そうだけど？」
「何で好きになったの？」
カズヒコは即答しようとしたのだが言葉に詰まってしまう。
ナツミを好きな理由。自分がナツミを好きなのは自覚している。だが好きになった理由がわからなかった。
「好きになった理由は？　好きでいられる理由は？　お願いだから教えて」
カズヒコは答えたくても答えることが出来なかった。
「何で教えてくれないの……？」
アサカワがそう呟くのだが、カズヒコは何故ナツミを好きなのか？　という問題の解答を探すのに必死で聞こえていなかった。
そのままカズヒコは考え続けた。アサカワもいつの間にか黙り込んでいた。
答えが出せない。何でオレは好きなんだ？　分からない分からない分からない……
ナツミが教室に入ってくるのをカズヒコは見つけた。「おはよう」と声をかけて、何故オレは彼女が好きなのかもう一度考えた。
結局、カズヒコは答えを出せなかった。

それから数日もしないうちにアサカワは学校に来なくなった。

カズヒコとナツミは喫茶店にいた。どっちが入ろうと言い出したわけではなく、帰宅中の話の流れで入る事になったのだ。
アサカワを心配しているナツミに「面白いこと探してるんじゃね？」とカズヒコは言った。
彼女が学校に来なくなった原因はオレなのだろう。とカズヒコは思いながらそう言うしかなかった。
そのあと、カズヒコはいつもの様に自他共に認める下らない話を語るのだが、ナツミはボンヤリと相づちを打つだけで、やはりアサカワのことが気にかかっているのだろう。とカズヒコは思った。
こういう時、何か気の利いた言葉をいえればどれだけ良い事か……カズヒコはそう感じながらも話すしか出来なかった。それがよい意味でも悪い意味でもカズヒコという人間だった。
「恋ってなにさ？」
突然ナツミにそう言ったのをカズヒコは聞き、固まってしまった。
恋とは、好きで好きでどうしようもない気持ちだとカズヒコは思っている。だが、その好きという気持ちが何処からやってくるのかわからなかった。
わからないものはわからないと一旦片付けて、カズヒコはとにかく喋る事にした。
「恋は下心。愛は真心……」
誰かがそう歌っていたのを思い出し、口にする。どういう意味合いで歌われたのかは忘れてしまったのだけど。
そこからカズヒコは言葉を繋げていく。言葉を紡いでいく。
カズヒコは恋について語り始めた。途中、自分が何を言っているのかわからなくなったのだが、カズヒコはありったけの言葉でイメージを伝えた。伝えきった。
だが、イメージは結局曖昧なものでしかない。
「感覚ってどんなものなの？」

ナツミの言葉にカズヒコはもう一度、恋とはなんなのか考え直す。
オレがナツミを好きな理由。
それを捉える事が出来たらオレが感じる感覚というものが説明できる。
なんとか言葉を……　このイメージに当てはまる言葉を……
ナツミはカズヒコの言葉をジッと待っている。
待ってくれるナツミが好きだ。
オレの言葉を待ってくれる君が好きだ。
ナツミの仕草のひとつひとつ、どれも好きだ。
カズヒコはこのまま思ったことを口にしてしまえばいいと考えた。
だが、またナツミが離れていくところを想像して思いとどまる。もう一度冷静になるよう努めた。
感覚とは……　知りたいという欲求なのかもしれないとカズヒコは思った。
オレはナツミが知りたい。ナツミの全てを知りたい。
「オレが言うのも変だけど、あれだろ。多分俺の言う感覚って奴は物語なんだと思う」
カズヒコはそう言ってから、何か伝えたいことが違う気が起きたのだがそのまま語り始める。
物語。
オレの物語はナツミの物語を必要としている。
先が知りたい。オレとナツミの物語の先に何が待っているのか。
ナツミは何を思っているのか。ナツミはオレをどう思っているのか。
そのイメージをカズヒコは言葉にした。しかし、妙な恥ずかしさのせいで再び曖昧な言葉を口にしてしまった。
「オレは変な子を好きになってしまう傾向がある」
カズヒコは照れ隠しの為にそう言った後、しまった。と後悔した。
ナツミは変な奴なんかじゃない。しかしカズヒコの口は要りもしない言葉を次々と語っていく。

もう駄目だ。もう取り返しがつかない。
「お前が変だよ」
ナツミはそう言って鼻で笑う。でもいつも楽しそうに聞いてくれる。
オレはナツミが好きだ。それだけで十分だ。好きに理由なんて必要ないんだ。
だが、カズヒコの口はまたもや勝手に喋りだす。性本能だか種の保存だかを語りだした。
それでもナツミは笑ってくれた。
カズヒコは自分の「感覚」というものをナツミがわかってくれなくてもいいと思った。
今が楽しければそれでいいのだ。そうカズヒコは思った。
「ねぇカズヒコ」
「なにー？」
「今好きな人いるの？」
ナツミはあの日のことを忘れているのだろうか？　もしくは覚えている上で訊いてきたのだろうか？
ずっと一緒にいられればいい。好きになってもらわなくてもいい。ただ一緒にいられるだけでカズヒコは十分だった。
「いるんだけど本当に好きなのか正直わからね」
結局好きという気持ちはそれだけの言葉で語れるものじゃない。
ナツミが好きだという理由もわからないままでも、好きということは変わらない。
それで十分だ。それで十分だろう。
カズヒコはオレは本当に馬鹿だな。と笑った。

転2裏　～アサカワ

朝川優子は安っぽいアパートに一人で暮らしている。
その理由は、彼女の両親が他界したからではなく、ましてや家出とかでもない。
彼女が父に「一人で暮らしたい」と願って、父が許可を出したからである。
それだけだ。父の許可があれば彼女は一人で暮らせるのであった。
今、彼女は壁にもたれかかって本を読んでいる。
彼女が読んでいる本は、四年前に友人だった男子から貰ったものだ。
その本を今でも読んでいるのは、彼のことが好きだからで、彼の考え方を知りたいからである。
この世界から消えてしまった彼のことをもっと知りたい。だから、彼から貰った最後のプレゼントを朝川は必死に理解しようと努めるのである。
自分が彼を必要とした様に、誰かが自分を必要としてくれる日を夢見る。
朝川優子は彼になろうとしていた。

＊

ある日、授業中にも関わらずアサカワは屋上にいた。
今朝のことで教室に居続ける事がつらくなったのだ。
アサカワは金網越しに見える町並みを眺め、きっと彼に嫌われてしまっただろう。とアサカワは思った。

終わってしまったのだろう。と彼女は思った。
終わったね。と彼女は言ってみた。
そうすれば少し気持ちが落ち着くかもしれないと思ったからだ。
しかし、何も変わらなかった。ただ、終わってしまった。とボンヤリ認識できただけだった。
アサカワ自身、彼に何故あんな質問をしてしまったのかわからなかった。
嫌われるということは彼女が一番恐怖する事であり、避けなければならない事だった。
誰かに必要とされなければ自分に存在理由はない。と彼女は思っているからで、嫌われるというのは彼女の中で必要がないと同義語である。
それを回避するのは当たり前の事だろう。
しかし、嫌われてしまうとわかっていてもアサカワは質問してしまう。
それが私なのだろう。と思い込もうとするがアサカワは納得出来なかった。
このまま帰ろうか。
アサカワはボンヤリとそう思って、それでいいと投げやりに帰宅する事に決めた。

＊

無断で途中下校した日を境に、アサカワは学校へ行くのが億劫になってしまった。
少し休んで気持ちを切り替えようと一日休んだのだが、そのままズルズルと休み続けてしまったのだ。
これはマズイと思いながらもアサカワは学校に行かずに家から出

ることもなかった。
家から出ずに彼女は何をしているのかといったら、ただ本を読んでいるだけだった。
引っ越してくる際に持ってきた本を傍らに積み重ね、布団に包まって読んでいる。それをもう四日間続けている。
物語を読んでいる間は自分を含めた全てを忘れることが出来たので読み続けた。
起きてから寝るまでずっと本を読み続けた。
それしかすることがなかった。他にすることなどないと彼女は思っていた。
五日目の朝、このアパートの大家さんが家賃のことでアサカワの部屋を訪ねてきた。
大家さんが毎月五日に集金に来るそうだ。それをボンヤリと訊きながらいい加減アルバイトを始めないとマズイと彼女は思った。
家賃を払わなければ追い出されてしまうと父親から聞いていた彼女は、急いでアルバイトを探すべく身支度を始めた。
学校を休んでアルバイトを探すのはおかしな話だと思いながら、アサカワは家を出た。

＊

アサカワは自転車に乗って、近くの駅まで走った。駅周辺ならアルバイトを募集しているところが沢山あるだろうと考えたからだ。
アサカワはペダルを漕ぎながら、どんな仕事があるか想像した。
駅周辺には喫茶店や本屋、他には飲食関係があったと記憶している。コンビニもあるのだが、過去にやった事があるので除外。
アサカワは本屋で働ければ良いな。と考えた。単純に面白そうだからだ。

もし本屋が募集していなければ居酒屋とかファミリーレストランも急がしそうで良いと考えた。
そう考えているうちに駅前に着いた。
駅前には商店街があったのでそこからバイトを探す事にした。
パン屋、八百屋、本屋。洋服店、精肉店、金物屋。
ひとつひとつ店の前で止まって、バイト募集の張り紙があるか探す。あったらすぐに携帯電話に情報を打ち込み、なければ次の店に向かう。
一つぐらい見つかるだろうとアサカワは思っていたのだが、そんなに甘くなかった。
まったくなかったのだ。あっても高校生不可となっていた。
なければ他をあたるしかない。
アサカワはそう思って商店街を出た。

＊

商店街から出たアサカワは、駅周辺をくまなく探し回ったのだが、見つけることが出来なかった。
今日は日が悪かったのだ。とアサカワは思って帰ることにした。
もし明日も見つからなかったら……　と考えて、アサカワは焦った。
今の家を追い出されたとしても父のところに戻るつもりはない。
父はそれを許すかもしれないが、アサカワ自身がそれを許せないのだ。
どうしたものかと考えながら、アサカワはペダルを漕ぐ。
その時一軒の店が目に付いた。なんとなく張り紙があるか見てみた。
あった。アルバイト募集の張り紙があったのだ。

アサカワはブレーキを握って止まる。
張り紙によると職種は古物販売買取となっている。
骨董屋の類だろうか？　とアサカワは思ったのだが、店内の様子が見えないので断定する事が出来なかった。
もう一度張り紙を見る。
アルバイト募集。詳細は店長まで。
電話番号は書かれていない。
アサカワは迷った。何の店かまったくわからないからだ。
しかし、明日バイトが見つかる保障もない。
アサカワは店前で長いこと悩んだ。
そして、決めた。
アサカワは自転車を店前に止めて入っていった。

＊

店内には所狭しと大小様々な物が置かれている。どれもガラクタにしかアサカワには見えた。
店の奥へと進んで行くと、背の曲がった老人がカウンターに座って寝ていた。
アサカワは声を掛けるが、老人は起きない。
アサカワはきっとこの人が店の主なのだろうと考えた。
だからもう一度声をかけた。
老人が身体をビクッと揺らして目の前に立つアサカワをジッと見た。
「すいません。アルバイト募集の張り紙を見て来たのですが……」
老人は黙ったままジッとアサカワの顔を見ている。
「あの……　それでアルバイトのほうはまだ募集されていますか？」
アサカワがそう言っても、老人は黙ってアサカワを見据える。

どうしたものかとアサカワが考えていたら、カウンターの奥からドタバタと足音を立てて若い男性が出てきた。
「親父！　お客さんが来たらすぐに教えろよ！」
男は出てきていきなり老人に怒鳴る。老人はやはり黙ったままだ。
「いらっしゃい。いやぁ～すいませんねぇ……　うちの親父モウロクしちゃってて……」
そう言ってから男はアサカワを見て「うおっ若者だ！」と驚いた。
アサカワは戸惑いながらもアルバイトのことを男に尋ねた。
「ああ！　やってるよ。毎日仕事はないし、あればあったで地獄の様な作業だよ。それでもオーケー？」
アサカワはよくわからないまま頷いた。
「うい！　じゃあ合格で。ボクの名前は三上坂。君の名前は？」
「朝川優子です」
「優子ちゃんね。はいはい……　じゃあ早速明日から来てもらえるかな？　見たところ学生のようだから五時ぐらいにきてくれればいいから」
「あの、どんな仕事なんですか？」
「物を直す仕事だよ」
そう言って三上坂という男は笑った。

＊

家について明日から始まる仕事についてアサカワは考えた。
物を直す仕事と三上坂は言っていた。
何を直すのか考えて、店にあった大量のガラクタを思い出した。
きっとあれを直すのだろうと思った。
学校は行きづらいし家賃のこともあるから早くから行こうとアサカワは思った。

三上坂さんの雰囲気からそうしても大丈夫な感じがしたからだ。
カズヒコとの件は仕事をして忘れてしまおう。
今は仕事をしなくては。
アサカワはカズヒコに対して罪悪感があったが、仕事を理由に逃げる事にした。

結（前書き）

4月28日、誤字訂正

結

朝、ナツミは学校に行く為に身支度を始めていた。
床には山積みされた文庫本が所狭しとあり、ナツミはその山を崩さないように慎重に足を運ぶ。
こんなに散らかるならあのノートを探さなければよかった。そうナツミは思ったのだが後の祭りだ。
カーテンレールに吊るされた制服を手に取って、袖に腕を通す。
着替え終わって、今度は教科書を鞄に詰め始めた。
机の上の教科書を詰めていく途中、「考えたことノート」がナツミの目に入った。
部屋が散らかった元凶であり、ナツミが今一番杞憂していることが書かれているもの。
ナツミはもう一度あの文章を読もうかと手を伸ばす。
しかし、確認するまでもないことだろう。と手を引っ込める。
昨晩、「告白について」という見出しの文章をナツミは読んでカズヒコから告白されていた事を思い出した。
私はどうしたらいいのか？　とナツミは考えた。
今更告白されたことに返事を出しても変だろう。それに、どう答えるつもりだったのかすら覚えていない。
当時の私は逃げる事を選択したのだ。ならば今の私も逃げ続けることにしよう。
そう思ってナツミはノートを本棚にしまう。
もう一度、告白の事を忘れてしまおうとナツミは決めた。
それで本当にいいのか？　と思ったのだが、それが一番だろうと決め付けてナツミは家を出た。

＊

ナツミが教室に入ると、カズヒコから声を掛けられた。
「ナツミちゃん、アサカワから連絡とか来たか？」
まさかいきなり声を掛けられるとは思っていなかったナツミは、どう答えるか迷って横に首を振ることにした。
「そうか……　アイツ、今日も学校来てないんだよね。ちょっと調べてきたんだがどうも無断欠席らしいぞ」
ナツミは彼女の席を見た。そこだけポッカリと穴が開いたようになっていた。
「さすがのオレでも心配になってきたよ……　最悪だよホント」
「何が最悪なの？」
「いや、ちょっとね」
カズヒコとアサカワの間に何かあったのだろうか？　ナツミはカズヒコが口元に手の甲を当てるのを見た。彼が考え込むときの仕草の一つだ。
やはり何かあったのだろう。
「アサカワの家の場所知ってるか？　一度様子を見に行った方がいいと思うんだが……」
ナツミは再び首を横に振った。
カズヒコがアサカワさんの事をよく思っていないだろうとナツミは感じていた。
しかし、彼女を気にしているということは少なくとも大嫌いではないのだろうとナツミは思った。
「何とかしたいよなぁ……」
「何でそこまでしようとするの？」
「友達だからに決まってるだろうが」
ナツミの言葉が信じられないのか、カズヒコは顔をしかめる。
「ナツミもアサカワの友達だろう？　アサカワに何か困った事が起

きたのなら助けるのはオレ達だろうが。ナツミ。なんか今日、おかしいぞ？」
「そんな事ないよ」
「……ならいいんだが」
そう言ってカズヒコは腕を組んで唸り始めた。そして彼の中で何か決まったようで「よし」と呟いてナツミと視線を合わせる。
「学校終わったらアサカワの家に行ってみるわ」
「場所がわからないでしょうに」
「そこはオレに任せなさい。情報収集がオレの趣味だからね。それよりナツミも行くよな？」
ナツミは頷く。
「じゃあオレは調べておくから、放課後になったら校門前で待ってもらえるかな？」
「わかった」
ナツミがそう言ってから少し間を開けて、カズヒコは怪訝そうな表情になった。
「やっぱし今日なんかおかしいぞ？　何かあったのか？」
何もないよ。とナツミは答えて、「本当にそうならいいけど」と呟いた。

＊

放課後、ナツミは校門の前でカズヒコを待っていた。
その間、ナツミはカズヒコから受けた告白について思い出そうとしていた。
私はどんな言葉を彼から言われたのだろうか？
いつもの様に馬鹿っぽい口調で馬鹿馬鹿しい告白？
それとも、いたって真面目な雰囲気でど真ん中ストレートな告白

を？
ナツミは思い出せない。
それよりも、忘れようとしているのに思い出そうとしている私はなんなのだろう？　とナツミは考えた。
私はカズヒコが好きなのだろうか？　でもそれがわからない。
別に彼の為に死んでもいいなんて思わないし、ずっと一緒にいたいとも思わない。
ただ、一緒にいると楽しいとは思ってはいるが。
ナツミはカズヒコについて考えてみた。
アサダカズヒコ。身長高めで顔はいたって普通。性格はお調子者。目立ちたがり屋。優しいところもあり、カッコいいところも少々。
悪いところは……　ん？　思いつかない。
そんな訳ない！　ナツミはもう一度考え直した。
アイツは馬鹿だ。馬鹿は駄目だ！　お調子者の馬鹿はどうしようもない！
そう思い込もうとするが、カズヒコの馬鹿さも嫌いではなかった。
私はカズヒコのことが好きかもしれない。とナツミの中で結論が出た。
その時、カズヒコはやってきた。
「悪い、遅くなった」
ナツミは首を振り、そんなことない。と口にした。
「そ、そう？　ならいいんだが……　やっぱし今日何か変だぞ？」
「何も変じゃない。それよりわかったの？」
カズヒコはニヤリと口元を吊り上げて「ああ」と頷く。
「場所は電車で四つ先の町だ。そっからちょっと歩く感じかな」
じゃあ行くか。とカズヒコは言って笑う。
地図が描かれた紙を見せ、得意げに笑ってみせるカズヒコを見て、ナツミはこの馬鹿はカッコいいかもしれないと思ってしまった。

＊

カズヒコの先導でナツミはアサカワの住むアパートに着いた。
そのアパートはアサカワのイメージと正反対の建物だった。
一言で言えばボロかったのだ。壁には亀裂が入り、屋根の塗装は退色し、所々ハゲている。
本当にここにアサカワさんは住んでいるのだろうか？　と思い、ナツミはカズヒコに尋ねた。
「ここであっているはず。アサカワの部屋は二階の三号室だ。行ってみよう」
カズヒコは外に取り付けてある鉄階段を上がっていく。ナツミもそれに続いた。
上るたびにギシギシと階段が鳴る。
上り終えて、一番奥の三号室の前に二人は立った。
カズヒコはノックを三回して、「アサカワちゃーん？」と声を掛けた。
何度かそれを繰り返したのだが、反応はまったく無かった。
「何処かに出かけているのかもな。少し時間を潰してまた来てみよう」
そう言ってカズヒコは階段を下りて行った。
アサカワさんは何処に行っているのか？　とナツミは思ったが、わかるはずがなかった。
ナツミも階段を下りて、カズヒコの横に立った。
「近くに時間潰せそうなところがあるかもしれない。行こうぜ」
ナツミは黙って頷いた。

＊

アサカワのアパートを離れてから時間は経ち、空は夕暮れ。
ここはカズヒコも始めて来た場所のはずなのに、カズヒコはスイスイと先に進んでいく。
「迷ったらどうするの？」
ナツミがカズヒコにそう訊くと、カズヒコは「なんとなくわかるから大丈夫だよ」と答えて笑った。
「何？　もしかしてナツミちゃん怖いの？」
「そんな訳ないでしょうに」
ホントかなぁ？　とナツミの顔を覗くように見た。カズヒコは口元を吊り上げニヤついていた。
ナツミはそれを無視するのだが、実際怖いのは事実だった。
「何処に向かってるのさ……」
「多分この先に公園があると思うんだが……」
そう言って少し歩くと本当に公園があった。
「カズヒコ、ここに公園があるって知ってたんでしょ？」
カズヒコはニヤつくだけで何も答えずに公園の中へ入った。ナツミも入る。
公園の端にベンチに見つけ、二人はそこに座った。
「夜の公園に女の子と二人きりで来るなんてドキドキしちゃうね」
「何馬鹿のこと言ってるのよ」
カズヒコの軽口にナツミはそう返しながらも、実際ドキドキしていた。
そこから二人は黙り込んだ。
長い長い沈黙。風に吹かれた木の葉がサラサラと音を立てる。
なんでカズヒコは黙っているんだとナツミは思ったが、口に出さなかった。
そういう雰囲気だったのだ。
これは退屈なのだろうか？　とボンヤリナツミは思った。
何も話さず、二人黙って夜風に吹かれる。
これは自分の中で退屈と分類していたものだ。しかし、今のナツ

ミは退屈ではなかった。
なんか、この退屈も悪くないと思ったのだ。
ボンヤリと二人で空を見上げる。
こんな時間がずっと続けばいいなとナツミは思った。
「ナツミ」
カズヒコが静かに口を開いた。その顔を見るとどこか緊張しているのがナツミにはわかった。
「オレさ、ナツミが好きだよ」
「知ってる」
ナツミの返答にカズヒコは少し驚く。
「アサカワさんとお近づきになりたいって言った時に言ってたじゃない」
「いや、あれは……　あれももちろん好きってことなんだけど、今のはもっと大きな好きっていう……」
カズヒコはそこで照れ隠しの為か頭を掻く。
「オレはナツミが好きです」
「どこが好きなの？」
「好きな理由はわからない。だけどナツミが好きだ」
カズヒコが真面目に語っているのを見て、ナツミは笑ってしまった。
「ホント、カズヒコは面白いよ。多分前もこういう感じだったのかな？」
ナツミの言葉を聞いて、カズヒコは「覚えていてくれたんだ」と呟いた。
ノートのお陰だけどね。とナツミは心の中で言った。
「カズヒコ」
「なんだ？」
「あの時、私は返事を出せなかった。今もそれにどう返事をしていいかわからない」
カズヒコは静かに次の言葉を待った。

「私はどう返事していいかわからない。だから……」
そう言ってナツミは立ち上がった。
「今回も逃げる事にします」
ナツミ自身何を言っているのかわからなかったが、なんとなく逃げなければならない気がした。
ナツミは逃げる事を宣言して公園の外へと走り出した。
突然の出来事にカズヒコは動けずにいたが、公園を走って出て行ったナツミを見て、急いで後を追った。

＊

ナツミは暗い夜道を走った。
カズヒコから逃げているのだ。
何故逃げているのか、ナツミにもわからない。
答えるのが怖いんじゃない。むしろ今でも好きと言ってくれたことが嬉しいぐらいだった。
でもカズヒコから逃げている。わからないけど逃げている。
心臓がとてもうるさい。うるさくなった原因は走っているからなのか、カズヒコの告白をきいたからなのかわからなくなった。
ナツミはひたすら走った。どこへ向かっているのかわからないが、走った。
後ろを振り返るとカズヒコが追ってきている。
捕まるわけにはいかないのだよ明智君！
ナツミは逃げながらも楽しかった。
長いこと走っていたら、前方に自転車に乗る人を見つけた。
ナツミはその人を追い抜かしてやろうとさらに速度を上げる。
自転車にどんどんナツミは近づく。
そして抜いた。

抜いた後ナツミは振り返り、遠くにカズヒコが居る事を確認し、自転車の主を見た。
「え？」
思わずナツミは声を上げてしまった。
自転車に乗っている人はアサカワだったのだ。
アサカワもナツミを見て、驚いたのかペダルを強く漕ぎ始める。
アサカワはナツミを抜いてどんどん先へと進んでいく。逃げたのだ。
何故逃げるのかナツミにはわからなかったが、逃げられたのなら追うしかないと全力で走った。

＊

ナツミは途中アサカワを見失った。アサカワはどこかに隠れてしまったようで姿が見えない。
ナツミは見失った付近に必ず居ると探した。
すると、近くのお店の前に倒れている自転車を見つけた。
きっとそこにアサカワさんは居る。とナツミは判断を下して直行した。
店の中に入ると案の定アサカワはいた。
肩で大きく息を吐き、今にも倒れそうな足つきで店の奥へと進んでいた。
「アサカワさん！」
ナツミが呼びかけると、アサカワは一度身体を震わせて奥へと逃げていった。
「ナツミ！」
振り返るとカズヒコが凄い形相で店の入り口に立っていた。彼も足がフラついている。

ナツミはアサカワを追って、カズヒコから逃げるように店の奥へと進んだ。
「待て！」
カズヒコはフラつく足にしっかりしろと渇を入れてナツミを追った。

＊

ガラクタが詰まれたカウンターの前に三人は立っていた。
三人とも肩で息をついて、ヨタヨタと足はフラついている。
立ってるのがやっとだという感じだった。
店の奥から何事だと店主である三上坂が出てきた。
「お、アサカワくん。何やってん……　ん？　お客さん？」
アサカワを囲むように立つ男女を見て、三上坂はそう言った。
三上坂にもこの状況はどういうことなのか分からなかった。
「アサカワくん、何かあったの？」
アサカワはかすれた声で「何もないです」と答えた。
なんだこの状況は？　と三上坂は首を捻った。

＊

三上坂の勧めで三人はカウンターの奥にある居間に通された。
居間にもガラクタは詰まれており、汚いところでごめんねー。と三上坂は悪びれる様子もなく言って、三人を座らせた。
三上坂は台所の冷蔵庫から紙パックの緑茶と三つコップを持って戻って来た。

緑茶をコップに注いで三人に差し出す。
「で、アサカワくん。これはどういうこと？」
三上坂は三人同時に緑茶を飲み干すのを見てアサカワに尋ねた。
「私にもさっぱり……」
その返答に三上坂はまた首を捻る。
「君たちはアサカワくんの友達？」
三上坂は緑茶を注ぎながらナツミとカズヒコに訊く。
「ボクにはさっぱり分からないんだけど……　あれかな？　アサカワくんを追っかけてきたの？」
ナツミは頷いた。
カズヒコが頷かなかったのを見て、三上坂はまたまた首を捻る。
「そこのイケメン君はその子を追ってきた訳なの？」
カズヒコは頷く。
「どういうことだぁ？」
三上坂はそう言って再度首を捻った。

＊

三人の話を聞いて三上坂は笑った。大いに笑った。
ナツミはカズヒコから逃げた。そしたらアサカワを見つけた。
アサカワはナツミに気づいて逃げた。
その光景を思い浮かべ、三上坂は笑ってしまったのだ。
「ホント、どこの青春映画だよ……」
そう言って三上坂は深く息を吐く。
「よくわからないけど、仲が良いってのは素晴らしいことだなぁ」
三上坂の言葉を三人は否定も肯定もせず、固まったままだった。
「まあいいや。ボクはもう退散するよ。あとは三人でじっくり話せばいいさ」

アサカワは立ち去ろうとする三上坂を止めようとしたが、ボクは関係ないもん。と彼は言って居間を出て行った。

＊

三上坂がいなくなった後、三人はしばらく黙り込んでいたのだが、ナツミが三上坂のことを尋ねたのを切欠にポツポツと会話が生まれていった。

「あの、三上坂さんって……　アサカワさんの親戚か何か？」

アサカワは首を横に振って、「あの人はここの店主」と答えた。

アサカワがそう答えたのを聞いてカズヒコは驚く。

「店主って……！　オレはテッキリ同年代だと……」

「あの人、今年で二十六歳だって言ってた。確かに大人らしくないけど……」

「マジで？　ありえねぇ！　あれで大人って言えるのかよ！」

「カズヒコがこのまま大人になったら三上坂さんみたいになるのかなぁ？」

「絶対ならねぇ！　なりたくねぇ！」

「でも、面白い人じゃないの。ねえ、アサカワさんもそう思わないかな？」

「……確かに」

「いや、面白くないだろ」

「少なくともカズヒコよりは面白いと思うけど？」

「私もそう思う」

「いや、ちょっと待て。何でオレがつまらない男扱いされてるの？　というかアサカワちゃんまで何言ってるの！」

「カズヒコはつまらないでしょう」

「あ、ちょっと待て。アサカワちゃんにオレ謝ってねぇの思い出し

た」
「え？」
「なんか……　あの時は悪かった。ホントごめん……」
「ちょっとカズヒコ、何かしたわけ？」
「違うの。謝るべきなのは私で……」
「よくわからないけど、ここはカズヒコが悪いという事でいいのでは？」
「私が……　ゴメンナサイ」
「いや、オレがいけない」
「あー、二人に何があったのが深くは聞きません。とにかく仲直りということで……」
「ごめんなさい……」
「悪かった……　というかなんでナツミが仕切ってるんだ？」
「場の流れという奴です」
「あ、思い出した。何で逃げた？」
「その時の流れに身を任せたのです」
「いやおかしいでしょ」
「何か……　あったの？」
「いや、話している途中で急に走り出して……」
「はい。その話はオシマイです」
「オレはナツミが好きだ」
「あー、聞こえない聞こえないー」
「好きだ」
「好きなんだって。ナツミちゃんは？」
「わかりませーん」
「カズヒコくんが好きだったのでしょう？　私にはそう見えていたけど……」
「そうだったのか……」
「そんな訳ないでしょうに」
「そうなんでしょ？　ちゃんと答えなきゃ」

「うーん……　でも好きな理由がわからない」
「それはオレもだ」
「カズヒコくん……　その発言はちょっと……」
「え？」
「さすがにそれは……　言ってはいけないと思う……」

＊

三人はその後、酔っ払った三上坂に追い出された。
夜風に吹かれながら三人は笑いながら歩いた。
それから少しだけ月日は流れた。
ナツミはカズヒコの関係に大きな変化はない。
変化を挙げるとしたら、帰宅途中に面白い同盟会議を開くのが日課となったことだろうか。
もちろんそこにアサカワもいる。三人は仲良く語り合うのだ。
お互い好きな理由がわかるまで、この関係を続けることを決めたナツミとカズヒコ。
そんな二人を見ていて、好かれようとするのをやめたアサカワ。
三人は喫茶店で楽しく恋について語り合うのだ。
人が人を好きになる理由に答えを出せる日を夢みて。

結（後書き）

最後までお付き合い頂きありがとうございました。
これにて「転校生と猫」はおしまいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4262p/

転校生と猫

2011年4月28日19時40分発行